



MIFA NEWS

No. 44

3/31. 2006

Moriya International Friendship Association

守谷市国際交流協会広報委員会発行

事務局 住所：守谷市大柏950-1

電話：0297-45-1111

URL: <http://www.fureai.or.jp/~mifa>

エチオピア大使講演会 & コーヒーセシモノー



左上＝講演するコアング・トゥットラム・ドゥング大使、左中＝エチオピアの写真集や民芸品などの展示、左下2枚＝コーヒーセシモノー



11月3日、ログハウスでエチオピア大使講演会が行われました。会場には民芸品やコーヒーセシモノーの道具、JICAから借りたエチオピアのポスターなどが飾られ、雰囲気盛り上げました。

講演会に入る前には、エチオピアにちなんだクイズも行われ、少しエチオピア通になった気分です。

特に、普段は目にすることのないコーヒーセシモノーは、エチオピアの生活を知る上での貴重な体験でした。

2005年10月～2006年3月の主な事業

- 10. 1 ラオス・プロジェクト研修員来市
- 10. 2 MIFAフェスタ
- 10.23 MIFAサロン「ウォーキング in MORIYA」
- 10.24 英会話初級講座開講
- 11. 3 世界を知るシリーズ「エチオピア大使講演会」
- 11.12・13 「大好きいばらき・国際交流ひろば」

- 11.27 MIFAセミナー「開発教育勉強会」
- 12. 3 イヤー・エンド・パーティー
- 12. 6 ラオス・プロジェクト最終報告会
- 12.10～11 筑波大学留学生ホームステイ
- 1.21 MIFAコンサート「バンドゥーラの弾き語り」
- 2.19 MIFAサロン「エジプトへようこそ」
- 3.10 平成17年度 茨城県国際化推進奨励賞受賞

草の根協力 ラオスプロジェクト



ラオス・ルアンブラバン、センケオ（平成16年度研修生）宅で

草の根技術協力事業（地域提案型）は、ラオスの県高等学校教員など教育関係者を日本（守谷市）に招聘し、学校現場における指導や運営に関する研修を目的に、2003年度から守谷市国際交流協会が取り組んできた事業です。

今年度は、チャンベン女史（子供文化センター副所長）とソンフォン氏（高等学校数学教師）の二人が、10月1日から12月9日まで守谷市に滞在し（来日期間は9月13日～12月10日）、守谷高等学校をはじめ、市内幼稚園、小学校、中学校等を精力的に視察しました。また、地域の青少年教育関係団体などの活動に参加、県主催の国際交流ひろばにも民族衣装を着て舞踊を披

露するなどさまざまな活動に意欲的に参加しました。

守谷市国際交流協会では、最終年度にあたり、12月にラオスを訪問し、事業に参加した研修員のうち5人に会い、研修で得た成果をどのように実践しているか、これまでの成果を確認しました。研修員からは、

- ・日本を紹介したり、戦後の日本の発展とラオスの発展の差を学生に考えさせている。
- ・世界遺産登録の家の修復には、奈良で教わった釘を使わない手法を使った。
- ・日本の朝礼を真似て、朝の打ち合わせの時間を持つようにした。
- ・管理職の机の上に名前の立て札を置くようにした。
- ・上の者の理解が得られないとき、「日本でもこうしている」と言うと、説得しやすい。
- ・センターのシステムを見直し、権限と責任を明確にし、組織図を作って掲示するようにした。
- ・募金箱を置くようにした。
- ・ゴミの分別を始めた。
- ・ラオスには本を読む習慣がないので、生徒に本を読む習慣を身に付けさせたい。

など、日本で学んだことをラオスで早速取り入れ、実践していることがうかがわれました。

今後の取り組みとしては、これまでの人的交流を生かし、ラオスの将来を担う青年たちを日本に招待することを検討していきたいと思います。

MIFA コンサート



今年のMIFAコンサートは、ウクライナの民族楽器、バンドゥーラ奏者の弾き語りで、ナターシャ・グジーさんをお招きしました。

マネージャーから、バンドゥーラは繊細な楽器でわ

ずかな温度差でも調律が狂うので、リハーサルで調律した後は室温を一定に保つことが必要で、それと同時に暖房の音さえ演奏の妨げになると言われました。「最高の条件で聞かせたい」というグジーさんの希望で、当日は暖房を止めることにしました。

開催日の1月21日は、まさかの大雪。悪路の中、ログハウスに来た人たちを迎えたのは冷えきった部屋。「コートを着たままで」と言われ、少し戸惑いの表情も見受けられましたが、演奏が始まり澄み切った水晶のような歌声が流れ始めると観客たちはその声に吸い込まれるかのように聞き入っていました。

グジーさんは日本語が達者で、何曲か日本の歌も披露しましたが、それらの曲は自分で詞の意味を理解し、自分が伝えたい歌であることを確認したうえでの選曲です。「涙そうそう」を歌った後は、6歳のときチェルノブイリで被爆した体験を語り、決して忘れてはならない事件であることを再認識させられました。

演奏会後の交流会ではグジーさんを囲んで話の輪が広がり、ウクライナの貴重な話を聞くこともでき、楽しい一日となりました。

第14回 開発教育 全国集会沖縄大会

2006年1月28日、29日に沖縄で行われた開発教育全国集会に、MIFA総務委員の笠原岳夫さん、青年交流委員の浅川由佳さんと於曾能亜美さんの3人が参加しました。



分科会 「移民県・沖縄から考える“ともに生きる”のために大切なこと」

浅川 由佳

これまで“移民”という言葉を目にしても、はっきりとしたイメージを持つことができなかった。なぜならあまりにも漠然としていて、遠いところに存在するものであるように思っていたからである。私がこれまでに持っていた“移民”に対するイメージは、主に東南アジアやアフリカで貧しい者たちが自分の国を追いやられるかのように、母国を捨て新しい土地に夢や希望を託し移住するようなものだと考えていた。しかし、今回改めて“移民”について学ぶ機会を与えられ、それがたいして遠いものではないということに気づかされた。よくよく考えてみれば、実はとても身近なところにも移民は存在していた。例えば、職を求めて日本に移住してくるブラジル人やスリランカ人もそうだし、私は今アメリカに留学中の身であるが、友達の中には大学卒業後そのままアメリカの地で職を探し住み着いてしまう人や、結婚が理由で国籍を移してしまう人もいる。そんな彼らも“移民”であることに変わりはない。

この分科会では6つのグループに別れ、クイズ形式で移民について考えてみた。そのうちの大きなテーマとして「なぜ沖縄からたくさんの人々が海外へ渡ったのだろう」

「外国へ行った人々はどんな暮らしをしていたのだろうか」「移民した人々が私たちに伝えたいこととは何だろうか」ということについて意見を交わした。本土の人々が移民した数に比べ、沖縄ではおよそ3倍近くの多くの人々が他国へと渡って行った。戦前・戦後を通して、現在では30数万人の沖縄系移民が世界各地で暮らしている。多くの人々はより豊かな暮らしを夢見て、いつかは日本に帰ってくることを誓って日本を離れていったそうだった。しかし、移住した土地では想像を絶する苦難に見舞われ、厳しい生活が待っていた。そんな生活の中でも、移民たちは母国である日本の心を忘れることなく、子供たちに母国の素晴らしさ、伝統を教え伝えていったそうだった。そんな移民たちのメッセージから私たちが学ぶこと、すべきことを改めて考えさせられた時間だった。「移民県・沖縄から考える“ともに生きる”のために大切なこと」正解となる答えは一つではない。だからこそ私たちは日々の生活の中で、互いがより幸せであるように、世界に平和が訪れるように、“ともに生きる”のために大切なこと、今私たちにできることを考える必要があるのだと思う。

分科会 「障害者問題と自立～途上国の福祉から学ぶこと」

於曾能 亜美

私には分科会がとても印象的だった。基調講演を聞いてコスタリカの素晴らしい面を知ることが出来たわけだが、その後の分科会でコスタリカの実情を聞いた。実際はゴミもよく捨てられていたりすると言っていたが、それこそが現実なのだと思う。

分科会では、最初にアイスブレイキングとして、4グループに分かれてそれぞれに与えられたテーマについての印象を紙に書く作業をした。2グループは「人々」。もう2グループは「障害を持つ人々」というテーマだった。それぞれ書いた後に比較したわけだが、「人々」では「愛」「助け合い」「仲間」などの言葉が並ぶ一方、「障害を持つ人々」では「偏見」「できない方がいい」「苦労」などの言葉が並んだ。それから分科会の中でも一番印象に残ったのが、海外の障害を持つ人々たちについての話だった。ガーナでは障害を持つ人もいわゆる「健常者」と何ら変わらず自分の存在もしっかり主張しているし、施設が少ないからか上手く生活に「溶け込んでいる」そうだった。しかし、学校へは行かず、物乞いでお金を稼ぐことが多いという。コスタリカでは親が子離れをできているが、それに比べて日本では子離れができていない親が多いように思えると青年海外協力隊の人が言っていた。海外の中で最も強く記憶に残ったのはネパールにいる障害を持った人たちの話。ネパールの精

神障害者は、ブラカードを持ち行進し、「自分たちは障害を持っている」ということをアピールするという。灯油をかぶり火をつけ、焼身自殺をはかる女性も多い。また、てんかんなどになった子どもは、幼い頃から紐で縛られ、行動できないようにされ、紐につながれたまま育てていく。そして海外での話が終わった後、沖縄に住む筋ジストロフィーの患者、新門さんの今までの活動を聞いた。彼は障害を持った人たちが、より良い生活ができるように自立生活プログラムなどを作った。その話の後、またグループで新しい発見などについて話し合い、分科会は終了した。

海外の障害を持つ人々についての話はなかなか聞けるものではないので、とても勉強になり、この分科会にしてよかったと思った。

スタディーツアーはアジアと沖縄の関連を話しながら沖縄の文化を学ぶ、ということだったがシーサーが他の国にもいるという話は驚いた。その他にも木や泡盛、焼き物などについてもいろいろ聞いた。アジアと沖縄がそこまで密接に関わっているとは思っていなかったのが、勉強になった。

今回の大会への参加で、改めて思ったのが、若い参加者の少なさだった。地元の高校から来ている人たちもいたが、もっと若者の参加を多くするのがこれからのボランティアに関する課題のように思えた。

MIFA セミナー 開発教育勉強会



11月27日、立教大学・田中治彦教授をお迎えして、開発教育勉強会がログハウスで開催されました。

ワークショップでは、援助を求める一枚の看板を教材に、賛否両論の意見を引き出すことにより、問題点を明らかにすることができました。このような作業を通じ、開発の発展形態である「慈善型開発・援助」から「プロジェクト型（技術移転型）開発・援助」へ。さらに、「参加型開発」へという開発の流れを理解することができました。

今後、国際協力・支援といった活動を行ううえで、このようなワークショップ型のセミナーはMIFAにとっても役立つものと思われます。今回のワークショップは9つあるステップの最初であり、残りのステップも行うよう検討したいと考えています。

MIFA サロン 「エジプトへようこそ」



2月19日、午後2時から4時まで、ログハウスで、エジプト人の外国人講師、ヒガブ・アハマド氏（筑波大学生、留学生親善大使）に、エジプトについて紹介していただきました。

氏の熱心な語らいに、60人の参加者からは活発な質問が続出し、そして、氏の広い視野にたったの紹介は、エジプト観を新たにするものでした。インテリジェンスの中に、親しみの持てる人柄がにじみ出ていて、とても好評な異文化交流会でした。

氏の熱心な語ら

イヤー・エンド・パーティー



12月3日、ログハウスで、イヤー・エンド・パーティーが行われました。

今年のパーティーはゲストを招かず、ゆったりした内容にと歌や演奏は盛り込みませんでした。子どもたちのためには小ホールに簡単なゲームなども用意し、大人のためにはビンゴゲームもありましたが、それぞれが今年一年を振り返りながら、いろいろな人と語り合う場となりました。

筑波大留学生ホームステイ



12月10日、北守谷公民館で正午から対面式を行い、その後、着物の着付けと「投扇興」を楽しみました。

ゲスト9人（韓国・中国・メキシコ・エジプト・フランス・USA）、ホストファミリー26人、山之内社中5人、スタッフ13人でしたが、今回のゲストは、20歳前後の若い人ばかりでしたので、美しい着物がさらに美しく映え、男性も若き



武士の風情で、とても似合っていました。

皆さん、留学期間が短いにもかかわらず、日本語がとても堪能でした。休日にも各家庭のおもてなしを受け楽しんだことと思います。東京湾の夜景を見ながらクルージングしたり、或いはコタツに入りながら子どもたちと遊んだり、互いの文化・歴史を語り、語りたらないのでまた会う約束を交わしたり、そんな報告をいただくとうれしくなります。

恒例で行っているMIFAの企画ですが、ささやかな中にも国際協力、異文化相互理解に役立つことができたと思います。